



野上清玄子全集
第八卷

岩波書店

野上彌生子全集 第八卷

第十五回配本(全二十三卷)

一九八一年八月四日 発行

定価 三〇〇〇円

著者 野上彌生子

発行者 緑川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五
鉄 岩波書店

電話 〇三二六五十四二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

©野上彌生子 1981

目次

目次

おつねの小説	三
娘へ	三三
悲しき真珠	三七
ころろ	三七
哀しき少年	三五
ははき木の歌	一一
山姥	一六
明月	一〇七
丸尾の死	一三九
草分	一五三

後記	二九
狐	二七三
砂糖	二七三

小
說
八

おつねの小説

おつねは親もきやうだいもない、あはれな孤児だといふ話であつた。彼女の田舎といふのも伯父のうちで、顔も見知らない時分に母親が亡くなつてからは、そこで育てられて来たのだと。——さう聞けば、親のない娘らしく、どことなく暗い陰のあるやうな気がしないではなかつたが、丈夫で、こまめに手足を動かし、気転も利くといふ風であつたから、わたしはむしろよい女中を見つけたのを悦んでゐただけで、閱歴についてべつに注意を払はうとはしなかつた。

が、或る日、仲働のたけが解きものをしながら問はず語りに話しました。

「おつねさんは、あれでずるぶん苦勞して来たらしいんでございますよ。叔母さんつてひとが意地わるで、お伽話のまま子苛めみたいな苛め方をされてゐたのでございますつて。九つとか十とかのころ、なにかのことからまたさんざ小言こごとをいはれ、そんなものは家にはおかないつて、粉雪まじりの風の吹いてゐる表へしめだされたので、おつねさんは本当にどこかへ行つちまふ気で、泣きながらも日暮れ方の村の街道を歩いてゐると、そこへ一人のおぢいさんが通りかかり、話をきいて、そんならわしのところへ来るがよいつて連れて行つたのださうですが、そのおぢいさんといふのが、町でも名

高い物もちの御隠居で、おつねさんはその晩から、そのうちの世話になつたのださうですが、丁度五六年前急病で死んだ末の娘が、やつぱりおつねさんといふ名前だつたとかで、おばあさんは、これはあのおつねの生れ代りに相違ないつて、おぢいさん以上に可愛がり、それはそれは大事にされたものださうでございますよ。」

「どこに運があるかわからないものだねえ。」

「まつたくで。ただその運がいつまでも続けば申し分はなかつたのですが、一二年さうしてゐるうちに、田舎の伯父さんのうちで、その物持の隠宅に引きとられてゐるのがおつねさんだといふことを嗅ぎだしたのでございますね。するとあれほど邪慳に追ひだしたくせに、なにか誘拐でもしたやうに、三百代言を使つてねぢ込んで来たのださうでございます。それも隠宅へは直接かけ合はないで、わざと本家の方に談判したので、養子で、ふだんから年よりたちと、その合はなかつた当主は、素姓の知れないものを世話して、なにか面倒がおきなければよいがと心配してゐたところだといひ、早速親もとに引き渡すことにきめたのださうでございます。年よりたちは悲しがつて、なんとかして置いておかうとしたさうですが、向ふは慾にかかつての仕事なので、泣寝入りになつた上に、大分とられたのださうでございます。今後も辛いことがあつたらいつでも相談にのつてやると、別れる時しみじみ申されたさうで、もう一度あすこへ逃げて行きさへすれば、御奉公などしなくてもすむのだけれど、そのために隠宅と本宅が睨みあひになつてはすまないから、それを思つて辛抱してゐるのだと申してを

ります。」

そんな話を耳にしてまだ一週間とたたないうちに、仲働のだけは新参のつねに対する意外なニューズで再びわたくしを驚かした。ほんたうをいへば、わたくしは女中部屋の世界については冷淡であり、またさうあることに努めてゐた。そこに存在してゐるのは彼等だけの社会であり、共同生活であり、一種の神聖同盟でさへあつた。お互ひで仲違ひするとか、悪口をいひ合ふとかしてゐても、一度奥との対立になれば、たちどころに敵意や反感は解消して、強固な一つの攻守同盟が結ばれる。——それ故、仲間のものについての女中部屋からの特殊な注進や密告は、善悪ともに、ただ聞き流すだけで、決して誘ひこまれたり、乗り気になつたりしないのが、主婦のとるべき最も賢明な態度だと信じてゐた。

しかし仲働のその時の話は、わたくしに平常の信条を忘れさせるほど珍らしい特種とくだぬであつた。つねはわたくしのうちに来る二月前まで、名家ではあるが金はあるがあまりないS男爵邸に奉公してゐた。ところで男爵の息子でまだ学習院に通つてゐる若様が彼女に恋をした。同時に同家の書生で夜学に行つてゐる法学生も、彼の秘密の思ひを告白した。彼女はもちろん書生よりは若い貴公子にこころをひかれた。しかし彼の熱情に打ち負けることは、彼の身分と名誉を忘れさせることであり、彼女自身としても、未遂げられない恋に墮落することであつた。彼女は拒んだ。若い貴公子の求愛はそのためにますます向ふ見ずになつた。彼女は途方にくれた。さうしてその度にその困惑と煩悶を、これもまた自

分を愛してくれてゐる法学生に打ち明け、彼の慰めを求めた。

或る日、男爵家の人たちは葉山の別荘に行き、彼女と法学生だけで留守居をしてゐた。すると法学生は突然二包になつた薬を見せ、これで自分と死んで呉れないかといひだした。

「おつねさんが呆れてゐますと、その人はかういつたのださうでございます。僕はきみが僕よりも若様を愛してゐることを知つてゐる。同時にまたその恋が君を不幸にすることも知つてゐる。だから思ひきつて僕と死んで呉れ。僕は若様ほど君から愛されなくとも、君といつしよに死ぬといふことだけで満足するのだ。僕は左の肺がなくなつてゐて、これから何かやらうとしたつて出来ない身体なのだから、せめて愛する君とこの世の中を去りたいのだつて。——おつねさんも田舎はあんな風だし、若様のことはしよせん諦めなければならぬのだと思ふと、命にはみぢんも未練がなくなつたさうですが、ただあんたと死んで若様に申しわけがないといふと、ぢや、書置にはつきり僕との間は潔白だといふことを書き遺しておけばいいぢやないか、といふ話になつて、

わたしはすぎはらさんと死にます。すぎはらさんを若様と思つて死にます。すぎはらさんとはな
んのかんけいもありません。若様のことはかりおもつて死にます。

——さう半紙に鉛筆で書いておいて、それからふたりで一包づつ薬を飲んだのださうでござい
ます。」

「だつて、お前——」

「そこがまるでお話なのでございますよ。立派に死んだはずのものが、ああやつてびんびんいたしてをりますのですから。——薬学校に行つてゐる友だちとかに貰つたのださうですから、モルヒネとはいひ条、もしかしたらほんの少ししか入れてなかつたのかも知れませんが。そんなわけで一昼夜、こんこんと眠りつづけただけで、幸ひに命は助かつたのださうですが、お邸の方はもちろんそれつきりでお暇が出たのださうでして。——」

つねの思ひがけないローマンスがかうしてわたくしの耳に入る頃には、女中部屋はもとより、御用聞のあひだにまで噂のたねになつてゐるらしかつた。さうして何か常人の企て及ばない冒険をしたものが、社会的の喝采を博するやうに、彼女はその興味ある経験のために冷かされたり、皮肉られたりする代りに、却つて一種崇拜に似た親しみと愛をえてゐるやうであつた。それに容貌からいつても、彼女はその恋ものがたりの女主人公として、それほど不似合には感じられなかつた。上脊のあるすらりとした姿に、きめの細かい皮膚をしてゐた。が、一ばん特長のあるのは外国映画の女優たちのもつてゐるやうな、尖の反つた長い睫毛と、その陰に黒い木の実のやうにかくれてゐる眼であつた。彼女が見るものに与へる親のない娘らしい暗さも、いつて見ればその反り返つた睫毛と黒瞳が、黄いろつぽく蒼ずんだ、肉のうすい、小さい顔に落す陰影があまりに濃すぎるためであるらしかつた。それだけにひどく表情的で、たのしさうに笑つたりすると、その小さい顔は夜が急に真昼になるやうに輝きわたつた。彼女はそんな時にはふだんとは別人に見えるほど晴れ晴れと美しかつた。

「奥さまにお願いがございますのですが。」
かういつて、つねは部屋の敷居ぎはに手をついた。

「改まつて、なあに。」

「もうお耳にはひつてゐること存じますが、わたくしもこれまでは了簡違ひをいたしましたので、
今後は氣をつけてまじめに働きたいと思つてをりましたのに、また困つたことが出来てまゐりました

はじめは彼女の自殺未遂のことをさすのかと思つてゐたわたくしは、その時言葉を入れた。

「知らないのよ。どうかしたの。」

「じつはこちら様へ御奉公申してをりますことがわかつては面倒だとぞんじまして、秘密にいたしてをりましたのですが、どうして聞きだしたのですか、若様からお手紙がまゐりました。御返事をさしあげないでそのままにいたしておきましたら、お電話がかかつてまゐります。それでみんなに頼んで、もうゐませんやうにいつて貰つてございますので、奥さまにもどうかそのおつもりにお願ひいたしましたでございます。」

わたくしとしても、それは適当な方法だと思つたので、その頼みに従ふことを約束したが、しかしどうしてまた彼女の新しい奉公先が、そんな貴公子に知れたのか不思議な氣がした。

「いつしよに御奉公いたしてをりましたお時さんと申すのに、いつでしたか活動にやらせて頂きました時出逢つたのでございます。そのひともわたくしが下りますとすぐお暇をいただきたくと申したので、大丈夫だと思つてこちら様に御奉公いたしてをりますことを打ち明けたのでございます。ところが旦那様がおかげんがお悪くつて、ただ今またお手伝ひに上つてをりますさうで、それからわかつたらしいのでございます。」

さういへば、そのお時さんといふ女中を使つて呼びださうとすると見え、いつも女の声でかかつて来る、と仲働はあとでわたくしに説明した。つねに取りつぐと、大急ぎで電話室に飛びこむが、二言三言話すか話さないに、すぐ出て来て、うれしいやうな、悲しいやうな、また困つたやうな顔で、しばらくは溜息をついてゐる。——その結果が、もう田舎に帰つてしまつたといふ返事をするこゝなつたのであつた。

そのあとでも電話がぜんぜんかかつて来ないわけではなかつた。それも不思議なやうにつねが買物にでた留守にかかるといふ廻り合せになつたので、彼女はもう下つてこちらにはゐない、とさう不自然でなく伝へることができた。

「またかかつたわよ。」

嵩ばつた買物ぶろしきを抱へて勝手口にはひつて来た彼女は、朋輩からさう聞くと、黒い大きな眼を穴にして突つたまま呟く。

「困つちまふ——どうしたらいいんでせう。」

しかし、それがいかに幸福な当惑であるかを云つてみんなにひやかされると、彼女は真赤になり、ひとの気も知らないで、と、わざとぷんぷんしながら女中部屋に逃げこむ。

時によるとがらりと溝口のガラス戸をあけるなり、

「ねえ、またかかつて来たでせう。なんだか、そんな気がして仕方がなかつたわ。さうして、本当はまだゐるんだつて告げ口されたやうな気がして、飛んで帰つたのよ。」

そんな時には實際電話がかかつてゐた。彼女が田舎へ帰つたといふことは疑はれてゐた。

「わたしは小さい時から虫の知らせが屹度あつたものよ。誰か今日来さうだとおもふと、きつとその人が来たし、いいことでも悪いことでも、なにかありさうに思ふと、間違ひなくあつたわ。でも、どんなことがあつてもゐるなんて云はないで頂戴よ。ね、そんなことからまたこのお宅にもゐられないやうな羽目になれば、田舎に親きやうだいがあるわけぢやないし、またどこか奉公口を探すよりほかに、それこそどうしようもないのだから、可哀さうだと思つてどうぞ余計な告げ口はしないでね。」

この歎願は半分は同情から、また半分は無意識の嫉妬から——誰もまだゐるなどといふ密告をして、追ひ求めてゐる愛人に彼女を渡すのはいやであつたから——朋輩に受けいれられた。それによつて恩義を示すとともに、彼等は内心いまいましい恋の邪魔をしてやれるわけでもあつた。

ほとんど雨ばかりの春が漸く暮れようとして、植物といふ植物はいつせいに緑を吹き出した。太陽

はそれまで蓄へこんでゐた光線を、今は惜しみなく撒きちらさうとするかの如く、夜明けからきらきらと照りかがやいた。

女中たちは、若い女の大げさな暑がりりで、あわてて軽い着物になつた。あらい縞や、緋のセルに、赤い友禪の帯をしめた彼女らが、裏庭の円い葉をひろげた青桐のかげで張り物をしたり、脇までまくりあげた健康な太い腕を洗濯盥で動かしたりしてゐる有様は、いかにも新鮮な初夏らしい風景であつた。

つねが表の電車通りにある洋裁所の夜学に通はして貰ひたいといひだしたのは、その時分であつた。使つて下されば三四年おちついて働くつもりなので、その間になにか一つでも身につくものを教はつておきたい。——その希望はもつともであつた。それに仲働のだけは料理の稽古にやつてゐたので、夜出すのが少し気がかりになつたものの、拒むことはできなかつた。もう半月近く電話もかかつては来ないのだし、たぶん間違ひはないであらう。——わたくしはさう考へた。

火、木、土の三日、夕方の台所を手早くすますと、つねはいそいで出かけて行つた。ミシンもやつと動くか動かないぐらゐであつたのに、器用な彼女は、一週間もすると子供のエプロンなどを縫ひあげて来た。

「可愛いでせう。あんたがお嫁に行つて赤ちゃんが生れたら、こんなの、お祝ひに作つてあげるわよ。」

「それよかあんたの赤ちゃんに、今のうちからたんと縫つてあげるといいわ。」

「いやなひと。」

細かいひだのついた、ほんのおもちやのやうな一枚のエプロンを、彼等はちよつと胸にあてて見た。このエプロンに限らず、小さな靴とか、レイス飾りのついた帽子とか、赤ん坊の可愛い装身具について若い娘たちが示すいとほしがりには、いはば、同じやうな小さい靴をはき、可愛い帽子をかぶり、まつ白いエプロンをした赤ん坊を、いつか自分のふところにも抱く日のあることを思ふ、無意識の憧憬に外ならなかつた。

つねは大事な製作物を行李の中にたんねんにしまひこんだ。さうして新らしいものをまたつぎつぎに覚えるために熱心に通つた。ギャザの下縫などは、みんなが寝たあとまで起きてゐるといふ風であつた。丁度二階の寢室の階段の横に女中部屋があつたので、どうかして寝つきのわるい夜ふけなど、わたくしは葡萄酒でも持つて来ようとして下りて見て、まだその時までもついてゐる女中部屋の電燈に、びつくりすることがあつた。

「もう寝ないと身体に毒ですよ。朝が早いのですから。」

さう言葉をかけると、彼女は決して睡さうもない声で、もう一針ですみますからと返事をした。

或る生暖い晩、また寝そびれて睡眠剤をとりを下りたわたくしは、開けつ放した女中部屋の中で、いつものミシン仕事の代りになにか手紙のやうなものを書いてゐる彼女を見出した。あまりに夢中に